

## 「そして奇跡は起こる」

武田綾乃

誰かを嫌いになることって難しい。自分を嫌いになるのは、こんなにも簡単なのに。

両耳に差したイヤホンから、自分の声が聞こえてくる。スマートフォンに録音した自分の声は、日常生活で自分が耳にしている声よりも少し高く聞こえる。客観的に自分の声を聞くのって、なんだか胸がザワザワする。その感覚を減らそうと毎日発声練習を繰り返すうちに、声を出すことへの抵抗は少しずつ減っていった。

流していた録音を切り、唯奈は駅の電子掲示板を見上げる。次の電車が来るまで、あと十二分。

今日もまた、上手くいかなかった。ベンチから伸ばした脚を、所在もなくふらりと揺らす。高校生になって入部した放送部は、穏やかな雰囲気、多分、唯奈には合っていた。それでも上手く馴染めないのは、自分の暗い性格が原因だ。友達になりたいと思うのに、自分のアクションのせいで誰かが不快になるのが怖い。嫌われまいと隅にいる行動のせいで、ますます誰かに疎ましがられる悪循環。放送部の皆は良い人だから、きっと話しかければ受け入れてくれる。それでも距離を取ってしまうのは、自分に意気地がないからだ。

唯奈は鞆の中から一冊の文庫本を取り出す。短い小説の一節を、唯奈はピンク色の蛍光色で塗り潰していた。

『でも、伝えようとしなきゃ、なんにも始まらないんだよ』

そんなこと、自分が一番分かっている。心の中には他人に対する感情がぎゅうぎゅう詰まっているのに、それを口にする勇気がない。

三年生の有紗部長の声は、いつも凜としていて美しい。

千咲先輩の声は、穏やかで心地が良い。

貴方の声が好きです。そう伝えれば、先輩は喜んでくれるだろうか。想像して、すぐに悲しくなる。だって、そんな想像したって無意味だ。唯奈には、自分から働きかけるような度胸がない。

電車がホームにやって来る。文庫本を閉じ、唯奈はその場に立ち上がった。

こんな風に、神様みたいな人が唯奈を迎えに来てくれたらいいのに。唯奈ちゃんと友達になりたかったんだ。そう言って、手を差し伸べてくれたらいいのに。そしたらきっと、唯奈はその手を強く握り締めて、絶対に離さない。

「でも、伝えようとしなきゃ、」

無意識に漏れた眩きに、唯奈は咄嗟に口を押えた。分かっている、分かっているさ。  
それでも、唯奈は奇跡を待っているのだ。  
誰かが自分を救いだしてくれる、その瞬間を。